川崎病に関する研究

分担研究者	東京女子医大小児科	草川三治
研究協力者	自治医大公衆衛生	柳川洋
	日赤医療センター小児科	川崎富作
	日本大学小児科	大国真彦
	東京医科歯科大学小児科	矢田純一
	国立公衆衛生院	杉浦昭
	東邦大学大橋病院病理研究室	直江史郎
	聖マリアンナ大学小児科	山田兼雄
	神奈川県衛生研究所細菌病理部	宮本泰
	京都大学病理学教室	濱島義博
	京都大学小児科	三河春樹
	久留米大学小児科	加藤裕久

〔研究目的〕

本疾患の治療および管理指導を行なうためにはその発症原因，発症機序が解明されなければならない。疫学的に，微生物学的に，また病理学的にこれを解明し，その上にたって，あるいはその解明ができない場合は臨床経験的にも，治療法，管理方法を検討する。またそれと共に長期予後に対しても調査検討を行うというのが本研究の目的である。

〔研究成果〕

まず最初に疫学的研究であるが，過去6年間の死亡票を調査し，0歳代が最も多いが，6歳以上の男児は，男児総数中10.7%を占めるということがわかったのは一つの成果であった。同時に府県別人口100万当りの死亡率も検討されたが，府県によってかなり差があることもわかり，さらに時間・地域集積性も検討されたが，極めて高い集積性のあることもわかった。これらの成果により疫学的原因究明の手がかりが得られたと考えている。

微生物学的研究では，杉浦・小原・草川らが便のウイルス，咽頭培養，血清学的検査などを行ったが，残念乍らこれという成果は得られなかったし，病理学的なモデルとしては，直江，村田らのカンディダを用いたものはモデルとしては略完成に近づいたものの，すぐこれが原因と結びつく様な成果は得られなかった。病理学的には胆嚢の病理組織が明らかになったことは成果ではあるが，これも原因解明とは程遠い成果であった。免疫学的な検索は矢田，加藤らによって免疫複合体力が検索され，矢田は抗体の単離に成功，加藤は免疫複合体とダニ抗原の関連を検討したが，何れも抗原の決定には至らず，今後の問題として残された。しかし加藤によって β_2-microglobulin の意義が見出されつつあることは新しい

成果であった。

突然死予防のための心臓病学的研究は，大国・加藤・草川・川崎によって行なわれ，超音波断層心エコー図によって冠動脈病変が拡張はもとより，狭窄まで見出されるようになったが，一方今まで余りわからなかった左心室壁運動異常という後遺症のあることもわかり，病理学的に推定される動脈硬化と共に成人後の問題を残すことが明らかとなった。

最後に治療の研究であるが，これは本研究班として非常に重要な共同研究であり，アスピリン，フロベン，プレドニゾロンの三群でプロスペクティブな研究を本年度より開始し，漸く100例を越した。まだ中間であり，結果は不明であるが，その成果は大いに期待できる。尚，山田によって血小板凝集能の異常が意外に長期にわたることが判明したが，これも今後の治療の上で重大な課題となった。

〔今後の課題〕

以上のような成果で，疫学的にも，又治療の面からも本年度はまだ今一歩の成果であった。しかし来年度には恐らくまとめられ，この川崎病の研究にも一つの区切りとなるような成果が得られる期待ができるものである。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

〔研究目的〕

本疾患の治療および管理指導を行なうためにはその発症原因,発症機序が解明されなければならない。疫学的に,微生物学的に,また病理学的にこれを解明し,その上にたって,あるいはその解明ができない場合は臨床経験的にも,治療法,管理方法を検討する。またそれと共に長期予後に対しても調査検討を行うというのが本研究の目的である。